

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告
2010年12月9日

東京大学大学院人文社会系研究科 社会心理学研究室 福沢愛 (博士課程3年)
個人派遣

研究題目：自尊心変動性とポジティブ志向との関連についての日伊比較(A Comparison of Japanese and Italian Relation between Self-Esteem Instability and Positive Orientation)

- (1) 派遣先: イタリア (ローマ) ローマ大学ラ・サピエンツァ 心理学研究室 (Gian Vittorio Caprara 教授)
- (2) 派遣期間: 2010年9月14日~2010年11月25日 (68日間)

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

ローマ大学ラ・サピエンツァで、Gian Vittorio Caprara 教授との研究プロジェクトを行う。Caprara 教授は、ポジティブ志向、特に自己効力感 (学業・人間関係などの側面に関する将来への期待) の研究の第一人者である。筆者はこれまで、この自己効力感と自尊心変動性 (自尊心の不安定さ) との関連を調べてきた。欧米の先行研究では、自尊心変動性と怒り反応といったネガティブな心理的機能の結びつきが指摘されてきたが、申請者の研究で、日本人の間では、自尊心変動性と自己効力感との結びつきが示された。この結果が欧米人の間でも共通してみられるものなのかを調べるため、ローマ大学の学生を対象に調査を行い比較文化的に検討する。

(2) 実際に達成された成果

ローマ大学で基礎心理学を受講するイタリア人学生に対して調査への協力を要請し、266名の学生を対象に日記式調査を行った。6日間の調査により、自尊心レベル、自尊心変動性、ポジティブまたはネガティブな出来事の頻度、自己効力感を測定した。

その結果、勉強・仕事に関する自己効力感に対して、自尊心変動性×ネガティブ出来事の交互作用の有意な効果が見られた。下位検定の結果、ネガティブ出来事を頻繁に経験した人の中では、自尊心が不安定な人ほど自己効力感が高いということが明らかになった。一方で筆者が以前に行なった、日本人大学生を対象とした研究では、ネガティブ出来事の頻度に関わらず、自尊心変動性が自己効力感との間に関連をもっていた。これらのことから、イタ

リア人の間では自己効力感が、ネガティブな出来事を経験した後の短期的なコーピングのために機能しており、日本人大学生の間では自己効力感が、日々の出来事に影響されない長期的なコーピングとして機能していることが示唆された。

(3)今後の研究展望

まず、今回イタリア人大学生の間で得られた結果が日本人大学生の間でも見られるかを検討する必要がある。日本人大学生の間では、自尊心変動性と自己効力感との関連がネガティブ出来事の頻度に関わらず見られており、イタリア人大学生の間では両者の関連がネガティブ出来事の頻度に影響されていたことが、今回日伊で見られた大きな違いである。しかし今回扱った尺度と日本の研究で扱われた尺度とは厳密に同じものではない。そのため今後は日本人大学生の間でも、イタリア人大学生の間でとられたデータと全く同じ尺度を和訳して使い、より厳密な比較文化研究を行なう必要がある。